



さくらクリニック

## 佐藤志津子 院長

東京メトロ丸の内線中野坂上駅より徒歩8分の、山手通り沿いのビル内にオフィスを構える「さくらクリニック」。訪問診療を専門とし、24時間365日体制で在宅療養をサポートしている。スタッフは、医師、看護師、医療相談員、事務スタッフ、そしてドライバーも含め20名強を数え、手厚い体制を敷いているのが特長。率いるのは、佐藤志津子院長だ。2003年の開業以来、献身的に訪問診療活動を続けてきた。「大変な部分もありますが、大きなやり甲斐を感じながら仕事に取り組んでいます」と柔和な笑顔で取材スタッフを迎えてくれた佐藤院長。開業以前は、東京医科歯科大学医学部付属病院の神経内科で、いわゆる神経難病（筋萎縮性側索硬化症やパーキンソン病など）の診断、診療に特化して経験を積んできたという。そこから一転して訪問診療に携わるようになった経緯や、やり甲斐、さらにはプライベートに至るまで、じっくりとお話をお聞きした。

（取材日 2013年2月27日）

24時間365日体制で、患者の在宅療養をサポート

—クリニックの特徴を教えてください。

医師の診療を定期的に受ける必要があるけれど、通院するのが難しいという方のご自宅に伺って診察や治療を行っています。自宅での療養を希望される方が、難病・重度障害者の方、病院から退院した後のケアが必要な方なども対象です。私の専門が神経内科ですので、神経難病の患者さんの割合は高めですが、それらに特化しているということではありません。診療科目的には幅広く対応しています。特化してしまうと視野も狭くなってしまいますから、私自身、勉強させていただくという観点からも、さまざまな病気を診させていただきたいと思っています。

—診療のシステムとスタッフ体制について教えてください。

定期的に行う訪問診療は、月曜から金曜の午前9時から午後6時までですが、それ以外の時間帯も、医師が転送電話を持っていますので、必ず連絡が取れるようになっていきます。必要時には、24時間365日体制で臨時往診にも伺います。また、急変の可能性が高い重度の患者さんの場合は、紹介元の病院、あるいは連携病院に前もって打診し、協力体制を作っています。スタッフは、私を含めて医師が7名、看護師が3名、リハビリスタッフ4名、医療相談員が2名、一般医療事務員が2名、医療クラークが2名、ドライバーが10名という体制です。患者さんには、病気の悩みに加え

て、福祉面での問題や、生活していく上で心配になることもあると思います。それらについてもサポートできるように、この人数でチームを組んでいます。訪問診療を専門に行っているクリニックとしては、手厚い体制が取れていると思っています。

—訪問診療のメリットを教えてください。

例えば神経難病の場合、病気そのものがわかりにくいですよ。あなたの病気がこうですよと病院で説明を受けても、頭が真っ白になるだけで何も理解できなかつた、という方がたくさんいらっしゃいます。定期的に自宅に伺う訪問診療ならば、患者さんの症状の変化に沿ってお話をしながら、少しずつ理解していただくことができます。このような形で患者さんに寄り添う医師が身近にいれば、気持ちの支えにはなれるのではないのでしょうか。外来では、そこまで長い時間を取って患者さんと接することは難しいですよ。私もかつて病院で外来勤務をしていましたが、患者さんとじっくりとお話をしたくても、そうしていたら1日すべての患者さんの診療が行えなくなってしまう。医師が身近な存在である、ということが訪問診療のメリットだと思います。

訪問診療を経験して、医師として仕事とどう向き合うべきか、答えを見いだした

—実際の診療は、どのように行われているのでしょうか？

さくらクリニック

〒164-0012 東京都中野区本町2-2-2

TEL:03-5358-8321

中野坂上駅 / 内科、神経内科

DATA

訪問診療は、あらかじめ決められたスケジュールに沿って定期的の実施します。診察と、必要に応じて、お薬の処方、点滴、経管栄養、中心静脈栄養、酸素療法、人工呼吸器の管理等の医療措置などを行います。できることは行いますし、できないことに関しては、それぞれ患者さんにとって良いと思われる選択をして、良い専門医を紹介してつなげるなどのコーディネートをしします。定期的に行くことで、患者さんの病状の変化が良くわかりますから、少しの変化を察知して、おোগことになる前に手を打つようになっています。優秀な訪問診療の先生は、重症の患者さんを抱えていても容体の急変が少ないんです。前もって手を打てることも、訪問診療の大きなメリットだと思います。起こり得ることを想定し、心構えを持って診療にあたるように心がけています。

—訪問診療を始めたきっかけをお聞かせください。

訪問診療を始める前までは、東京医科歯科大学医学部付属病院の神経内科などで、専門性の高い診療を行っていました。100万人に1人とか数人という発生率の病気の患者さんに対して、検査をして確定診断を付けることが主な仕事でした。診断を付けてご説明して、それで私の担当は終わっていました。数年の勤務医経験の後に、大学院に進学したのですが、その頃、元同僚だった先生の紹介で、訪問診療の仕事をアルバイトとして始めることになりました。その仕事をしてみて、目の覚めた思いがしたんです。それまでは診断を付けるまでが仕事で、その後の患者さんの生活にはまったく関わりを持っていませんでした。

断を付けることは臨床医師としては一つのゴールですが、患者さんにとっては、新しい生活の始まりなんです。診断が付いた後、どう病氣と向き合って生活していくか。患者さんにとってはそのことのほうが大きな問題だと気がつきました。実はその頃、医師として仕事とどう向き合っていくべきか悩んでいたこともあり……。答えがはっきりと見い出せた気がしましたね。

—訪問診療を行うなかでのやり甲斐を教えてください。

訪問診療では、患者さんとコミュニケーションを取りながら、これから起るであろうことに対してどのような覚悟が必要か、どんな選択肢があるのか、心構えを共有します。経過によっては辛い場面もありますが、患者さんのそばにいていくことで、困難と一緒に乗り越えていくことができるんです。それを実感できた時やり甲斐を感じます。一人ひとりの患者さんと深く長くお付き合いできることもやり甲斐です。裏方的な仕事ですよ。でも、適切な手を打って患者さんの危機を回避したい、最低限のダメージを抑えたい、そういうスタンスで関わっていると、信頼も寄せていただけようになります。良い時も悪い時もありますが、最後までずっとお付き合いできます。医師としては、幸せなことだと思います。

哲学から、精神医学、そして脳の機能を深め神経内科医へ、患者のパワーを自らの糧に

—医師をめざしたきっかけや、神経内科を専門にされた経緯を教えてください。

子どもの頃から医師になるうと考えていたわけではないんです。医大に進む前には、文系の大学を卒業しています。小学生の頃から本を読むのが好きで、本の中に自分の居場所を求めるタイプでした(笑)。大学では哲学を専攻しました。哲学を勉強していくなかで、フロイトとか精神分析、精神医学に強い興味を抱き、精神科医になりたいと思うようになりました。学問的な興味から医大を受験したんです。医大で勉強していくうちに、今度は脳の機能へと興味が出ていきました。このような変遷を辿って、卒業後、東京医科歯科大学医学部付属病院の神経内科に入局することになったんです。関連病院もいくつか回り、いろいろな臨床経験も積みましたが、臨床よりも研究志向のほうが強く……。医師になつた5年後に東京医科歯科大学の大学院に進んだのも、実は研究者になりたかったからなんです。でも大学院に入ったことで、結果、訪問診療と出会ったわけです。人生ってどう転んでいくかわからないですね(笑)。

—リフレッシュのためにやっていることなどありましたら教えてください。

録り溜めしておいた映画を観ることが、一番のリフレッシュ法ですね。有線テレビで良い映画をたくさん放送しているチャンネルがあって。映画は大好きなんです。ハリウッド系よりも、小難しくったり辛臭い映画を観たくなることが多いです。観た後でずしんと心が重くなるような。根暗かもしれませんね。陰気で

難解と言えば、今は横綱はミヒヤエル・ハネケ、ラース・フォン・トリアーあたりだと思んですが、尊敬してます。あと、イギリスのケン・ローチ監督も大好きです。韓国映画も面白いですね。最近日本映画も頑張っていると思います。帰る時間が遅いのですが、睡眠時間を削ってでもだらだらと映画を観て過ごすことが多いんです。生きてよかったと思える瞬間ですね(笑)。翌日の仕事のためには休息を取ることも必要ですから、ほどにしないといけないとは思っていますが、止められないですね。

—最後に、読者へのメッセージをお願いします。

病気の種類によらず、通院するのに負担が大きくて困った……、ということになったら、お気軽にご相談ください。当クリニックでなくても、最寄りの自治体の医師会にご相談されてもいいと思います。介護保険を使っていらないと思いませんか。関わりのあるケアマネジャーに相談されてもいいでしょう。とにかく、悩みがあれば遠慮なく、相談しやすいところに相談していただきたいです。私たちが関われるケースでしたら、喜んでお役に立ちたいと思いますし、いろいろな要求をしていただきたいです。ご自分のご病気を認識した上で、その中でどう生きていくのか主体的に考えていただきたいと思います。そのような患者さんと出会うとうれしくなります。ご自分自身で、積極的に道を切り開いていくとされる患者さんの姿を見ると、背筋が伸びます。力をいただけたいです。皆さまからのご要望の1つ1つを糧に、より良い訪問診療ができるように、私たちが成長していきたいと思っています。

中野区  
Nakano-ku

Doctor's File  
街の頼れるドクターたち「ドクターズ・ファイル」

